



明日を拓く

学校報
令和2年 3月12日
No.54
美郷町立美郷中学校

■栄叶学年の門出・卒業証書授与式…肅然挙行

美郷中学校第八期生栄叶学年143名の卒業証書授与式は、新型コロナウイルス感染防止策のため、大変遺憾ですが、在校生が参列できない異例の儀式となりました。

生徒会の発案により、去る3月3日(火)の昼の放送で、生徒会長T. Oさんが卒業式のために準備した送辞を読み上げ、下校時間帯には生徒会執行部が門送りをしました。栄叶学年への感謝の気持ちはきっと伝わったことでしょう。

そして、本来答辞となるべき卒業生代表の言葉は、Y. OOさんが「別れの言葉」として保護者、教職員に向けて読み上げてくれました。1、2年生の皆さんは是非お読みください。



第八期卒業生代表 Y. OO



かつて経験がないほど、穏やかに迎えた令和最初の新年は、六郷のかまくら行事も中止になるほど、雪国らしさが感じられないものでした。そして、小正月が過ぎ、春の訪れを感じる日差しの暖かさが、別れの日も近づいている

ことを教えてくれました。

三年前の四月、まだ着慣れない少し大きめの制服に身を包み、緊張の中で迎えた入学式。名前も知らない新しい仲間の方が多く、これから始まる中学校生活への期待と、それよりも大きな不安を抱えてスタートしたあの日。私たち百四十三名は、八期生「栄叶学年」としてこの学び舎で出会い、心ひとつにして、困難に立ち向かい、自分たちの夢の実現のために邁進してきました。この三年間で、私の心に強く残っていることが二つあります。

一つ目は、その活動に誇りをもち、互いに切磋琢磨して励んだ部活動です。二年生の夏、先輩方が引退し、いち早くリードを任されたのが部活動でした。初めは、分からないことも多く、先輩方のように上手く行かないことがたくさんありました。しかし、苦しさや辛さを仲間と分かち合い、協力し支え合うことの大切さを学び、それぞれの部活動が見事なワンチームになっていきました。また、部活動の枠を超えて集い、辛い朝練を笑顔で乗り越えた、都市陸上競技大会では、たくさんの選手が成果を残し、その先の自分たちの活動に、弾みを付けることができました。そして迎えた夏の総体。勝利を目指し、死力を尽くして戦った結果、男子バスケットボール部の全国大会ベスト16をはじめ、多くの部活動が全県大会・東北大会に駒を進め、大躍進することができました。伝統の駅伝部も、男女そろって、八年連続全県大会出場の襷を繋ぐことができました。文化部も、吹奏楽部のマーチング東北大会「金賞」をはじめ、数々の賞を受賞することができたことを、誇りに思います。

二つ目は、美郷町、美郷中、そして、自分は、いったい世界の中でどんな存在なのか、何ができるのかを考えるきっかけとなった、タイ交流です。私たちの力で何が発信できるのか、何をもち帰っていただければ喜んでもらえるのかなどを真剣に考え、おもてなしに努めました。この生活を当たり

前とやってきた自分にとって、他国での生活や他国の方を招いての活動を通して、それが当たり前ではないことを、改めて実感しました。そしてこれをきっかけに、一昨年講演に来てくださった池間哲朗さんが続けている「アジアチャイルドサポート」の意味を深く考えました。

自分たちができること・・・

一心祭にその場があると考えた私たちは、「限りない夢 ～みんなの想いを風に乗せて～」というテーマのもと、地域の方々へ感謝を伝え、世界で暮らす一人としてできることを考える場にするために話し合い、活動に移しました。オリジナル蛍光ペンの販売や、屋台やバザーの売り上げで、地域の老人ホームへの車いすの寄贈や、アジアチャイルドサポートの支援活動への寄付を実現することができました。この活動を通して、一人の力では小さくてできないことも、みんなで行えば大きな力になり、私たちにもできることがたくさんあることを学びました。

また、毎年、地域の方々楽しんでくださり、好評を得ているステージ発表、中でも全校合唱「大いなる秋田」はアンコールに忘れて、初めて「賛歌」を披露しました。たくさんの方から感動の声をいただきました。何よりも自分たちが、笑顔で全身を揺らして歌ったあの一体感の感動を、忘れることはできません。

今年は、いよいよこの国で、オリンピックが開催されます。世界中の一流選手が集い、熱戦が繰り広げられるかと思えば、ワクワクします。タイ王国バドミントン選手団の、ホストタウンとしての役割を期待される美郷町。私たちが、タイ交流から学んできたことを生かす、絶好のチャンスと考えます。在校生の皆さん、私たちの活動を受け継いで、聖火リレーをはじめ、美郷中生としての力を結集してできる最高のサポートや応援を、よろしくお願いします。

ブリティッシュヒルズで見た、美しい雪景色の中の、抜けるような青空。スカイツリーから眺めた都会の夜景や、船上から見た急ピッチで進むオリンピック施設の建設。コートから聞こえる、ボールの弾む音、歓声や声援、そして拍手。体育館から聞こえる、歌声・演奏・エール。黒板を走るチョークの音。教室から聞こえる、笑い声。コンテナから漂う、給食の香り。スタート

を告げる、雷管の音。目に染みる、なべっこの煙。さまざまなシーンの、さまざまな出来事が、私たちの五感を刺激して、汗や涙や笑顔とともに、共通の思い出として刻まれた三年間が今、終わろうとしています。私たちの義務教育のスタートは東日本大震災に見舞われた年でした。そして、終わりは、目に見えない新たな驚異に見舞われ、予測不能な事態となりました。しかし、どんな困難が訪れようとも私たちは、絶対に負けません。

谷川俊太郎先生が、「卒業証書」という詩の中で、『丸めた証書の、小さな丸い穴の望遠鏡で覗くきみの未来は、星雲のように混沌としていて、しかもまぶしいもの、教科書にはけっして載っておらず、蛍の光で照らしてみても、窓の雪で透かしてみても、正体を現さない、そのくせ君をどこまでもいざなうもの』と教えて下さっています。楽しみなような、不思議なような、こわいような、ワクワクするような。私たちは、これからそれを味わう旅に出ます。道はそれぞれ違って、この学び舎で育った私たちを支えてくれる、共通の思い出と、仲間の満開の笑顔の花束を胸に、旅立ちます。

これまで深い愛情を注いでくださった父・母・家族・そして先生、全ての方々に、心からの感謝をお伝えして・・・

(全員で)「ありがとうございました」

令和2年3月7日

